

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷一十三第

行發日一月一十年五和昭

論叢

遊興税の若干問題 法學博士 神戸 正雄
日本の家族制度と民法 文學博士 三浦 周行

說苑

勢力と經濟 文學博士 高田 保馬

德川時代の工業と商業資本 經濟學士 菅野和太郎

米の卸賣相場と小賣相場との關係 經濟學士 谷口 吉彦

世界商品價格の決定 經濟學博士 作田 莊一

獨逸舊税制の崩壊と財政調整法 經濟學士 中川與之助

歸屬理論の一考察 經濟學士 柴田 敬

雜錄

元祿時代歸農武士の家計 經濟學博士 黒正 巖

統計拾穗抄 法學博士 財部 靜治

正司考祺の專賣反對論 經濟學士 堀江 保藏

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

(禁轉載)

世界商品價格の決定（下）

作 田 莊 一

五 國際共通分業と商品價格

國民の間に生産の要素及び條件が自由に移轉される限りに於て成立する生産分業が國際共通分業であるが、これは現代に於ても尙ほ狭い範圍に止まつてゐる。但し生産の要素及び條件が殆ど何國にも存し且つ餘り優劣の差を見ない生産事情の下に起る生産は、之れらの自由移轉が行はれなくてもそれは問題とならず、實際に於ては均しくこれを共通分業の中に加へてよい。こゝで問題となるものは各別分業を破つて共通分業に進める生産である。この範圍に入る生産は、最も移轉し難い富源に依頼することの少ない工業、その中でも高級の技能を持つ職工を多く要せず且つ國際的移轉が障礙なく行はれる原料を用ゐる工業を主とする。棉糸布生産の如きはそれに屬する。原料の生産は各別分業に屬するが、原料の國際的移轉が自由なる限りはそれを用ゐる生産は共通分業に進み入る。尤も生産要素の自由移轉が行はれるときは、國民需要の存する限り、孰れの國民にも生産が企てられ、従つてそれは國民自足を促がして國際分業を自ら解消せしめるとも云へる。然り充分に國民自足が出来るやうになれば、そこには已に國際分業なく、同種企業に分擔經營が唯だ萬民分業の形式をとることとなる。されど現實には國民の生産能力には時代的にも進歩

程度の差異があるから、後進國民は數量又は價格の點に於て先進國民に供給を仰ぐを必要又は便宜となし、その限りでは尙ほ國際分業及び貿易の餘地を残してゐる。例へば棉布に見る所の英日支の關係の推移がそれである。

共通分業の範圍に於ては、國際社會を一體とする同一の社會的生產基礎が存立することゝなる。かくて共通分業に至つて始めて安んじて、商品の價格が生産費の比較差によらず、その絶對差によつて決定されると言ひ得る。國際共通貨幣の側からのみ絶對差による價格に引込まれたる各別分業の商品と異り、共通分業の商品は國際社會的生產基礎の側から必然的に非強要的に絶對差による價格を付與されるのである。こゝに至つて始めてリカルドの貿易理論が適用を見なくなる。一國の物價平準が高まつても、各別分業商品であれば、輸出價格を抑へて輸出を繼續し得るが、共通分業商品となれば、長い間輸出價格を低位に置くことは出来ないから、輸出は行詰つて果ては同種商品の輸入を見ることすらある。

近代の國民經濟は相互の交通を發展せしめて或範圍までは國際共通分業を見るに至つたが、その範圍では殆ど國內でも國民間でも價格決定の事情を同ふすると言ひ得られる。されど國內には交通の障壁がないが、國民間には嚴重な境界が存し、その境界線は國民經濟の統一性によつて引かれる。國民經濟はその統一體系によつて國民交通關係の系統及び秩序を各別に保持してゐる。かくて日常生活品を初多くの商品は國民毎に一つの需要及び提供の系統を具へ且つ一定の國民的規律の下に立つてゐるから、國際各別分業の範圍は勿論として、國際共通分業の範圍でさへも

舉つて國民的規模を解いて萬民的規模に合流することを許されない。故に大概の商品の價格は、先づこの國民的系統の中にて、生産提供費に支配され、消費需要資力に制約され、その間に需供の均衡状態に適應して決定されるのである。國際共通分業の商品は、かゝる國內市面に於ける商品價格—遡つては生産費—が直接に絶對的に對比されるべきとき、その低き國より高き國に商品の移動を見る。その移動は二以上の國民需供系統の間に生ずる移動であり、複合的構成を具へる國際需供系統に於ける移動である。この點は各別分業の商品にあつてはもとより當然のことであるが、共通分業の商品にあつては數々萬民分業の場合と混同され易いから、特にその點を指摘し置く必要がある。

尙ほまた國際共通分業に於ては各國民の生産が互に相通じて一つの社會的生產を形成するが、しかし政治經濟的には一が他から嚴重に區劃されてゐる。國家は國民系統に於て缺陷あるときは意識的に外國品を誘引し、その系統が外國品によつて攪亂されるときはこれを拒斥する。そこに輸出入を促進又は抑制する獎勵金・關稅等の種々の手段が用ゐられる。又企業結合が外國地に投資を行ふ場合には國內にて高く賣り得るやうに保護關稅が働いてゐる。凡て斯の如きは關係的には共通分業商品の生産費の増減となつて現はれ、これまた國際商品價格の決定事情の中に加はるのである。運賃の如きは國內と國民間にとにあつては程度の差であり、否寧ろ同じ貨物の運賃がロンドンから神戸までの分よりも神戸から京都の指定地までの分が少かつた事例さへある。これと異り政治經濟的作用は、均しく共通分業商品であつても、國內價格と國際價格との決定事情を

異らしめる。

序ながら國際共通分業より來る商品移轉は交換か流通かの點に就て一言したい。現代の國際商品移轉は形態の上では國內と擇ぶ所なき流通の状態を呈するが、實質的には必しも然うではない。普通の輸出入が國民間の交換であることは勿論である。一國民が他國民に資本を投じてもそれが商品の輸出と伴ふ限りは、又資本を回収するときにもそれに商品の輸入が伴ふ限りは、時間的に見ればやはり國民間に於ける財貨の交換と云へる。されど投資利得を以て輸入を加へその相手の利拂國が輸出を加へる場合になれば、その範圍だけは已に交換を越えて實質的に流通に移つたと云へる。對外資本利得の他に對外勤勞所得の授受に伴ふ所の輸出入も亦然うである。この點は國內に見る所の利潤・利子又は給料收得者の用品購賣と同様である。この國際流通は次に述べる萬民分業に於ける商品流通と重なり合つてゐるが、しかしそれも國民を一體とする對外收支の均衡作用並に調節政策によつて制約される點では、やはり國際交通に屬するものである。

六 萬民分業と商品價格

國際共通分業は、國內の生産分業が國民社會的生產を行ふ如くに、國際社會的生產を行ふものである。而してそれが國際の語を冠するは自己統制を行へる國民經濟の結合なることを示す。然るにこの國民經濟の統制は必しも一切の生産を規律するのではなく、重要産業にして經營難を訴へるもの、外は、概して私人の經營するまゝに放任してゐる。この放任の範圍は國によつて廣狹

の差はあれど、放任され居る所の分業生産、特に各國に共通なる分業生産は必しも國境及び國籍に拘ることなく、専ら社會的生產基礎並に企業條件に惠まれたる場所に起り、またその産物の販路も國境及び國籍に拘らずに開かれて行く、これは近代の資本家的生産及び流通の特色である。この場合には同じ國民が同種同質の貨物を一方に輸出しながら他方に輸入することも數々ある。しかしそれは嚴密に言へば已に國際貿易ではなく、國境を見ない萬民的商品販路の交錯状態に外ならぬ。その點は恰も同種のものでありながら大阪製品が東京に賣出され東京製品が大阪に賣込まれるが如きである。私はかゝる生産分業を國際分業より區別して萬民分業と呼ぶ。ローザ・ルクゼンブルグは、獨逸にて同種の貨物が一方に輸出され他方に輸入される例を擧げて、國民經濟の獨自の存在を否定してゐる。いかにもビュヒャーの唱へたやうな國民經濟觀はそれで破り得られるが、それでは國民意志經濟の獨自の存在を傷けることは出来ない。かゝる國民經濟の並立關係に於て國際交通經濟が成立するが、同時にまた國民的規制を受けない方面に於ける各個經濟の並立から萬民交通經濟を成立せしめ、ローザが指摘せる事實の如く、萬民生産分業及びこれによる商品の萬民流通を見るのである。この分業の下にては、生産地と消費地との距離とか、生産者の販賣技能とか、消費者の嗜好とか、政治經濟的でない種々の事情によつて國境を越へて商品が流通するのである。

萬民分業の下に生産される商品の價格は、分業状態が同様なる如く、概して國內商品價格と同様に決定される。即ちそこでは唯だ商品の生産費が支配し購買資力が制約しつゝ、需供の均衡對應

によつて價格の決定を見る。それは完全なる流通價格であつて、交換價格ではない。國內商品價格と同視し得られる世界商品價格はこの萬民分業の範圍に於けるものである。しかしそれでも尙ほ二者は全く同様ではない。國內價格には國家の統制が行はれ、價格の調節あり、公定あり、專賣決定あり、多くの商品價格は放任されるも、それは自然的自由でなく統制下の自由決定であるから、必要あらば何時にてもその自由が制限される。斯の如きは萬民流通價格に絶えて存しない事情である。

七 世界商品價格の決定

私は以上數項に亘つて世界交通經濟に於ける種々の生産分業とこれより來る商品價格の決定事情とを列舉的に説述した。それは定型的・原則的な特色を擧げたるまでにて、具體的には尙ほ幾多の事情がそれに加はり、又はその變形を生せしめる。またそれは世界商品價格の決定事情を分析して見たのであるから、現實の價格決定は必しも如上の事情が一々具現するのではなく、寧ろ種々の事情が合流して具體的に價格を決定せしめながら、而かもその中にて孰れかが、支配的な勢力を示現するのである。従つて具體的には如何なる複合状態を呈するかと言ふ問題は商品の種類に従つて一々考察する外はない。

世界商品價格の決定事情に就て、これを發生的に觀察するならば、先づ國際分業が起つて後に萬民分業が発生する。國際分業の中でも、初めは各別分業であり、その中でも必要分業が端緒と

なる。必要分業及び貿易から誘引されて便宜分業及び貿易が發展する。この分業及び貿易の範圍に於ては、貿易業務が各別の貨幣又はエスペラント式貨幣を媒介手段とするものと國際別殊貨幣の爲替に依存するものと國際共通貨幣の爲替に依存するものとの三段の發展をなせる點に着眼し、それらが各々異なる價格決定事情を有することに留意することを要する。國際經濟交通の共通基礎は先づ利害の明白なる且つ國民性の稀薄なる貨幣交通に就て實現されたるが、これに添ふて生産分業も亦緩漫ながらも幾分づゝ共通化して來た。しかしこれが近い將來に於て何處まで發展し得るかは見極め難い。國際分業の利益を高唱し、リストからは萬民經濟を推稱するものと同様に言はれたイギリスの自由主義學者も、理論及び政策共に國際各別分業に注目するのみにて、一向に國際共通分業の利益と發展とを主張してゐない。共通分業が盛んに發展するならば、ごれはご世界の富が増加し人類の物質的幸福が増進されるか知れない。この結果こそイギリス自由主義學者の理想とする所であるにも拘らず、奇怪にも彼等の所説は共通分業にまで進み出ること差控へて、唯だ自然的事情に基く勞資移動の困難を擧げるのみである。斯の如く共通分業にすら説き及ばさなかつた學説に對して、これ萬民經濟を主張するものなりと憤慨したる國民經濟論者の批判は寧ろ言ひ過ぎてゐる。萬民交通上の生産分業は、自由主義の實現後に於て、國際分業の輪廓の中にて、主として資本主義活動の推進によつて出現したのである。

斯の如く世界交通に於ける生産分業は漸次に階段を踐んで種々の形式を開展せしめたるが、その各階段の分業形式は概ね現在に存して重積されてゐる。何故にそこでは新しく出現せるものが

古きものと交替しないかと言ふに、それは經濟交通が自然的には國民的規模から世界的規模に擴大されながらも、國民經濟としては大體に於て意志的統制の完成に向つて進みつゝあるからである。かくて世界交通に於ける複雑なる生産分業は、財貨の移轉を或は交換に止め或は流通に進めその中にも種々の移轉形式を執らしめる状態が國內流通と著しく趣を異らしめる。そこに世界商品價格の決定事情を複雑ならしめる理由が存し、またその理由が世界價格の考察に就て種々の反對せる學説を生ずるに至つた所以である。リカルドが「一國內に於て諸財貨の相對的價值を支配すると同じ法則は二國若くは其以上の國々の間に交換される諸財貨の相對的價值を支配するものではない」と言へるは、國內共通分業の商品價值と國際各別分業の商品價值とが決定法則を異にすることを指摘せるものである。しかしリカルドの國際價值説は彼の價值法則の例外をなすとは言ひ難い。それならばそれと解されるやうに相當の説明が加へられる筈である。蓋し價值法則に例外を許すことは彼の學説にとつては決して些末の問題ではないからである。同時にまた彼の比較的生産費説は單に國際生産分業の利益を指摘したものともし難い。分業の利益と云ふは收益を増大する生産分業を前提とする消費分益の状態であり、この分益關係は少くともリカルドの見たる各別便宜分業の下にあつては必ず價格によつて定まる。國際價值及び價格の法則を外にして國際分業の利益と云ふことは考へられない。リカルドが國內分業と國際分業とに於て價值及び價格の法則を異にすると見てゐたことは明かであつて、彼の國際貿易理論が學説史上に耀いてゐる所以はその點にある。思ふにリカルドの價值説には國內と國際との差別に先ちて一般價值法

則があつて、それが國內と國際とに於て異つた形式を執ると見るのであらうが、彼の說では一般價值法則と國內價值法則との區別が明瞭でないから、國際價值法則が恰も一般價值法則の例外であるかのやうに見られるのではあるまいか。尙ほ私見に引付けて言へば、國內交通に於ても初めは各別分業の價格が成立し後に共通分業の價格に移つたが、國際交通では今尙ほ各別分業の價格が廣く支配的であるから、同時存在としては國內價格と國際價格とは異なる法則の支配を受けると見られるのである。又更に國際交通に於ても已に或程度までは共通分業が成立し、その上に國際共通貨幣の流通によつて各別分業の價格までが貨幣の側から共通分業の價格形成を強要されるから、この方面を見たる人々はリカルドの說に反對して、國際價格も亦國內價格と同一の法則によつて決定されると考へるに至つたのであらう。難問題の解明は、多くの場合に、或方面を正しく解しながら他の方面を見逃し易い。或程度まで歴史的分析を試みたこの小篇の私見も、多分同様の缺點を免れ得ないであらうことを恐れる。